

浪花踊に関する史料調査:  
佐藤家伝来の浪花踊番付（第一回～第六回）

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 笠井, 津加佐, 佐藤, 恵 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/40202">http://hdl.handle.net/2297/40202</a>

# 浪花踊に関する史料調査

## — 佐藤家伝来の浪花踊番付 (第一回～第六回) —

人間社会環境研究科 客員研究員

笠井 津加佐  
佐藤 恵

### 要旨

本稿は、佐藤家に所蔵される浪花踊に関する史料の紹介である。北の新地浪花踊は、近代における大阪文化の精華ともいべき芸能であった。残存史料によれば、明治15年の上演記録が初回であるが、火災や戦争による中断がある。本稿では浪花踊の番付のうち、大正4年から9年までの6回分を写真版で紹介する。なおこの史料は、所蔵者佐藤恵の祖父駒次郎が、十五年戦争末期、疎開先に携行し、現在に伝えられたものである。駒次郎は戦前、北の新地で永楽席を営み、北陽演舞場や浪花踊に貢献した人物である。

番付史料等は、今後も順次、紹介を続ける予定である。

### キーワード

浪花踊, 北陽演舞場, 大阪北の新地

## Survey of Materials for *Naniwa odori* (浪花踊) — Sato's *Naniwa odori* (浪花踊) *Banzuke* (番付) from the First Performance to the Sixth Performance —

Guest researcher Graduate School of Human and Socio-Environmental Studies

KASAI Tsukasa

SATO Megumi

### Abstract

The aim of this paper is to introduce Sato's materials on *Naniwa odori*.

Kita-no-shinchi *Naniwa odori* was part of the culture of modern Osaka. It started on 15 in Meiji (1882), but there were two breaks, one caused by a fire and the other by WW II.

In this paper, photo versions of *Banzuke* (番付) (from 4 in Taisho (1915) to 9 in Taisho (1920)) are presented. These materials survived as a result of Mr. Komajiro Sato (佐藤駒次郎) carrying them to his place of refuge during WW II. He is Sato Megumi's grandfather and the son of Mr. Unosuke Sato (佐藤卯之助), the owner of Eirakukan (永楽館), a story-teller house (寄席) in Kita-no-shinchi. From the Taisho era to the early Showa era, Komajiro managed Eirakuseki (永楽席), a house for *geikos* (芸妓), professional female entertainers, in Kita-no-shinchi. He

contributed to *Naniwa odori* and Hokuyoenbujo (北陽演舞場), where *geikos* in Kita-no-shinchi performed *Naniwa odori* in spring.

We will continue to present them in the near future.

### Keywords

*Naniwa odori* (浪花踊), Hokuyoenbujo (北陽演舞場), Kita-no-shinchi (Osaka)

## はじめに

大阪四花街の一つである北の新地（現在の北新地）では、明治15（1882）年以降、北ノ新地歌舞練場で浪花踊を開催していた<sup>1)</sup>。京都の祇園甲部で始まった都踊<sup>2)</sup>に触発されたものであった<sup>3)</sup>が、明治23年歌舞練場が焼失した<sup>4)</sup>ため、浪花踊も中断することとなった。その後、大正4（1915）年、北陽演舞場が落成し浪花踊も復活されたが、十五年戦争の影響により、昭和12（1937）年、再び中断した<sup>5)</sup>。北陽演舞場は、昭和20年、空襲により焼失した。浪花踊は、戦後の昭和29年再開された<sup>6)</sup>が、演舞場は再建されず、サンケイホールや毎日ホールで上演を続けた。昭和45年、万国博覧会で四花街合同公演が行われた。昭和47以降、「大阪おどり」として公演されていたが、現在では途絶えている<sup>7)</sup>。

本稿では、大正4年北陽演舞場の落成とともに復活した浪花踊に関して調査を行った。調査は、共同執筆者である佐藤の依頼を受けて、佐藤所蔵の史料の調査という形で笠井が進めてきた。調査過程で、浪花踊の舞台美術を手掛けた田中良氏の著作<sup>8)</sup>から、浪花踊が花柳舞踊研究会の影響を深く受け、花柳流家元、二世花柳壽輔氏を初め多くの舞台関係者らの指導のもと、高い水準の舞台芸能であったこと<sup>9)</sup>や、新舞踊運動といわれた当時の舞踊界の動きにも連動したものであった<sup>10)</sup>ことなどを知るに従って、その史料を整理し記録する作業が重要であることに思い至った。さらに、第64回東洋音楽学会大会報告において、この史料の一部を紹介したところ、史料保存の意義と必要性を司会者からご教示いただいたことも、重要な動

機である<sup>11)</sup>。

従って、本稿では、浪花踊に関して概要を述べ、浪花踊に関する佐藤家伝来史料のうち、簡易版番付について、その概要を説明し、紹介することを目的とする。本稿は、佐藤が2章、佐藤と笠井が4章を共に、その他を笠井が担当した。

なお、資料引用に際しては、旧字体を当用漢字に改めるなど、表記を適宜改めた場合がある。

## 1. 浪花踊概要

上述した「北の新地浪花踊」再開前後の大阪四花街（かがい）の状況は、『近代歌舞伎年表 大阪編』<sup>12)</sup>から知ることができる。この年表によれば、「浪花踊」と称された踊りが二種類確認される。一つは、今回取り上げる北の新地「浪花踊」（『近代歌舞伎年表 大阪編』、初見は大正4年<sup>13)</sup>）であり、もう一つは、新町「浪花踊」（『同』、初見は大正11年<sup>14)</sup>）である。四花街においては、そのほか、南地五花街「蘆辺踊」（『同』、初見は明治35年<sup>15)</sup>）その地「木花踊」（『同』、初見は大正3年<sup>16)</sup>）が行われていた。

『近代歌舞伎年表 大阪編』の初見に関して以下の点に留意しなければならない。「北の新地浪花踊」に関しては、同書初見は大正4年であるが、残存する第二回浪花踊番付所収資料により、明治15年の番付が確認され、古い「浪花おどり」が存在していたことが確認できた<sup>17)</sup>。新町浪花踊の同書初見は、大正11年であるが、「第十二回浪花踊」と記述されているので、年一回の公演であれば、明治44年が初回であったと考えられる。また「蘆辺踊」に関しては、同書初見は明治35年であるが、

大正6年の項に、「第三十三回蘆辺踊」と記述されており<sup>18)</sup>、年一回の公演であったとすれば、明治18年に蘆辺踊が始まったと考えられる。以上、三点である。

『近代歌舞伎年表 大阪編』は、昭和13年分まで編纂されており、昭和13年には、四花街の踊りが公演された記録は確認されない。一方、田中良『舞台美術』<sup>19)</sup>の記述から、北の新地浪花踊が、日中戦争の影響で、昭和12年、第23回を最後に中断していることが分かるので、「北の新地浪花踊」以外の踊りも、戦争の影響で中断していたと考えられる。

## 2. 史料の伝来について

大阪市が大大阪と呼ばれていた大正末期から昭和の初め、北の新地も、芸者衆800人以上を抱える、日本でも有数の花街であった。それは、大阪の経済力と活力に支えられて花開いたものであり、正に北の新地は、その粋と芸のレベルの高さで群を抜いていたと、北の新地生まれの筆者・佐藤は、幼い頃より、祖母や母より聞いて育った。

曾祖父、佐藤卯之助は大阪市北区永楽町に「永楽館」（演芸場）を営んでいた。また、祖父、佐藤駒次郎は、「北陽演舞場」そして「浪花踊」の舞台に携わり、北の新地の発展に力を注いでいたと祖母や母から聞き取ってきた。

「浪花踊」について、祖父は、花柳流二代目宗家元、花柳壽應氏や舞台美術家田中良氏など、当時の超一流の芸術家と親交を深め、心血を注いで「浪花踊」を第一級の舞台に育て上げたようである。

その芸への熱い思いから、祖父は、これから順次公開予定の史料も、戦時中は疎開先まで持参して戦火から守ったと母たちが言っていた。

公開に先立ち、同様の史料が、北の新地内に残っていないかと思い、北陽演舞場を建設した大林組や、共に浪花踊に携わってきた北の新地の古い知人などに尋ねたが、筆者・佐藤が所蔵している史料以上の分量を現在のところは見出すことができなかった。

筆者・佐藤の元にも今回紹介する番付史料のうち、愛蔵版と思われる頁数の多い番付は6回分しか残っておらず、筆者・佐藤が所蔵するものが、番付以外の史料も含めて、史料的に中途半端な分量のようにも思い、発表を躊躇う気持ちもあった。しかし、祖母や母から伝え聞いた祖父の浪花踊への熱い思いを思い出し、こうして、戦火を潜り抜けて今日まで筆者・佐藤の手元に史料が残ったことなども考え併せ、発表することとした。

## 3. 番付

浪花踊の番付として、筆者が確認したものは二種類である。浪花踊の入場者へ配布されたと考えられる簡易版番付と、入場者が別途購入したと思われる愛蔵版番付である。

簡易版番付は、大正4年に復活した浪花踊総ての番付が佐藤家に所蔵されている。愛蔵版番付は、第2回、第6回、第8回、第13回、第15回、第18回の6回分が所蔵されている。

### 3.1 簡易版番付について

簡易版一冊の構成は、年代の推移とともに多少変化するが、概要は以下のとおりである。

表紙 「浪花踊」

- ・歌詞記述（3頁～4頁）。
  - ・日毎の番組。第一回番付は28頁。第二回番付以降は、概ね5～8頁。
- 第一回番付は、曲ごとの出演者氏名を、上段に立方、下段に地方を配置した二段組みで記載。第二回目番付以降は、概ね4～5組に分けて立方、地方の出演者を、順番に三段組みで記載。

裏表紙「北新地 演舞場」（のちに「北陽演舞場」の記載）と電話番号の記載。

注、舞台衣装の説明（第三回～第八回）、場面の解説（第四回～第八回）が付加される。茶席出番表の付加もしばしば見られる（第十六回以降）。なお、各種の広告が挿入される。

### 3.2 愛蔵版番付について

愛蔵版一冊の構成は、内容は簡易版と概ね同様であるが、浪花踊が演じられた北陽演舞場の外観写真並びに内部写真と概要、曾根崎新地並びに浪花踊の概要、舞台扮装写真並びに出演者、衣装(説明もあり)、結髪などの写真、書割などが収録されている。以下に、第二回番付を例として掲げる。

- 表紙 オ 「浪花踊」  
ウ 広告
- 一丁 オ 薄葉に「浪花踊」上演期間、時間、場所などの記載。  
ウ 白
- 二丁 オ 北陽演舞場外観写真  
ウ 同特等観覧席並びに本館舞台写真
- 三丁 オ 同貴賓待合室、特等待合室、一等待合室、二等待合室写真  
ウ 特等茶室、酒場、一等茶室、特等一等玄関写真
- 四丁 オ 北陽演舞場解説  
ウ 曾根崎新地略誌
- 五丁 オ 同  
ウ 曾根崎新地の昔(大火前)、曾根崎新地の今(復旧後)写真

- 六丁 オ 浪花踊概要  
ウ 第一回浪花おどりの古番付写真
- 七丁 オ 柳亭種彦氏作第二回浪花踊の唱歌と新聞記事写真  
ウ 浪花踊衣装写真
- 八丁 オ 芸妓写真(九丁表まで)
- 九丁 ウ 広告(十二丁裏まで)
- 十三丁オ 出演者写真(廿七丁裏まで)
- 廿八丁オ 広告(卅一丁裏まで)
- 卅二丁オ 歌詞(卅三丁表まで)
- 卅三丁ウ 浪花踊 場面解説
- 卅四丁オ 衣装概要  
ウ 出演者番組(卅五丁表まで)
- 卅五丁オ 北新地席貸及芸妓扱店案内(卅六丁裏まで)
- 卅七丁オ 広告  
ウ 奥付
- 裏表紙オ 広告  
ウ (大阪三越呉服店の広告あり)

## 4. 番付史料

第一回浪花踊番付(12.0×18.5cm)





四日 大祭 浪花踊音組

雲 雲 雲  
特 山 頭  
音 音 音  
頭 頭 頭

浪花踊音組  
立向

方

長  
引  
地

方

四

五日 大祭 浪花踊音組

雲 雲 雲  
特 山 頭  
音 音 音  
頭 頭 頭

浪花踊音組  
立向

方

長  
引  
地

方

五

六日 大祭 浪花踊音組

雲 雲 雲  
特 山 頭  
音 音 音  
頭 頭 頭

浪花踊音組  
立向

方

長  
引  
地

方

六

七日 大祭 浪花踊音組

雲 雲 雲  
特 山 頭  
音 音 音  
頭 頭 頭

浪花踊音組  
立向

方

長  
引  
地

方

七

八日 大祭 浪花踊音組

雲 雲 雲  
特 山 頭  
音 音 音  
頭 頭 頭

浪花踊音組  
立向

方

長  
引  
地

方

八

九日 大祭 浪花踊音組

雲 雲 雲  
特 山 頭  
音 音 音  
頭 頭 頭

浪花踊音組  
立向

方

長  
引  
地

方

九

十日 大祭 浪花踊音組

雲 雲 雲  
特 山 頭  
音 音 音  
頭 頭 頭

浪花踊音組  
立向

方

長  
引  
地

方

十

十一日 大祭 浪花踊音組

雲 雲 雲  
特 山 頭  
音 音 音  
頭 頭 頭

浪花踊音組  
立向

方

長  
引  
地

方

十一

<p>大茶目 十七日</p> <p>立曲 方 長引 地 方</p>	<p>常陸 音深 頭標</p> <p>立曲 方 長引 地 方</p>	<p>常陸 音深 頭標</p> <p>立曲 方 長引 地 方</p>	<p>常陸 音深 頭標</p> <p>立曲 方 長引 地 方</p>
---	--	--	--

<p>大茶目 十五日</p> <p>立曲 方 長引 地 方</p>	<p>常陸 音深 頭標</p> <p>立曲 方 長引 地 方</p>	<p>常陸 音深 頭標</p> <p>立曲 方 長引 地 方</p>	<p>常陸 音深 頭標</p> <p>立曲 方 長引 地 方</p>
---	--	--	--

<p>大茶目 十四日</p> <p>立曲 方 長引 地 方</p>	<p>常陸 音深 頭標</p> <p>立曲 方 長引 地 方</p>	<p>常陸 音深 頭標</p> <p>立曲 方 長引 地 方</p>	<p>常陸 音深 頭標</p> <p>立曲 方 長引 地 方</p>
---	--	--	--

<p>大茶目 十五日</p> <p>立曲 方 長引 地 方</p>	<p>常陸 音深 頭標</p> <p>立曲 方 長引 地 方</p>	<p>常陸 音深 頭標</p> <p>立曲 方 長引 地 方</p>	<p>常陸 音深 頭標</p> <p>立曲 方 長引 地 方</p>
---	--	--	--

<p>大茶目 十六日</p> <p>立曲 方 長引 地 方</p>	<p>常陸 音深 頭標</p> <p>立曲 方 長引 地 方</p>	<p>常陸 音深 頭標</p> <p>立曲 方 長引 地 方</p>	<p>常陸 音深 頭標</p> <p>立曲 方 長引 地 方</p>
---	--	--	--

<p>大茶目 十七日</p> <p>立曲 方 長引 地 方</p>	<p>常陸 音深 頭標</p> <p>立曲 方 長引 地 方</p>	<p>常陸 音深 頭標</p> <p>立曲 方 長引 地 方</p>	<p>常陸 音深 頭標</p> <p>立曲 方 長引 地 方</p>
---	--	--	--

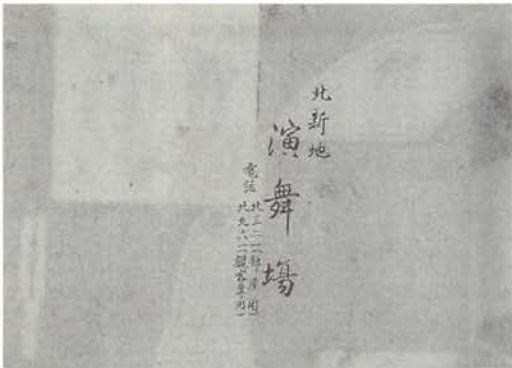
<p>大茶目 十八日</p> <p>立曲 方 長引 地 方</p>	<p>常陸 音深 頭標</p> <p>立曲 方 長引 地 方</p>	<p>常陸 音深 頭標</p> <p>立曲 方 長引 地 方</p>	<p>常陸 音深 頭標</p> <p>立曲 方 長引 地 方</p>
---	--	--	--

<p>大茶目 十九日</p> <p>立曲 方 長引 地 方</p>	<p>常陸 音深 頭標</p> <p>立曲 方 長引 地 方</p>	<p>常陸 音深 頭標</p> <p>立曲 方 長引 地 方</p>	<p>常陸 音深 頭標</p> <p>立曲 方 長引 地 方</p>
---	--	--	--









第三回浪花踊番付 (12.4×18.5cm)











第五回浪花踊番付 (12.0×12.0cm)

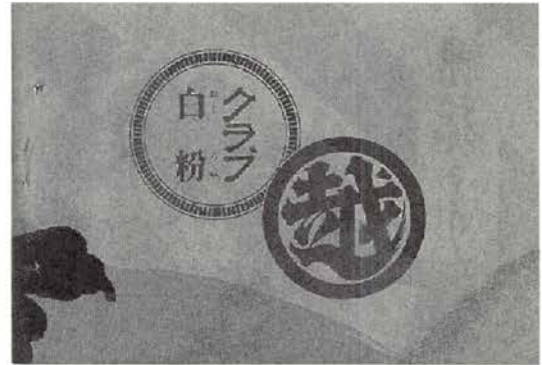












## 【注】

- 1) 「浪花踊の起源(略)新曲に手をつけて「浪花おどり」と命じ、初めて開演したのは実に明治十五年六月であった」日生元三郎編輯兼発行者『浪花踊』(第二回番付)発行所 北陽演舞場、大正5年、六丁表。
- 2) 都踊りは、明治5年に始まった。
- 3) 「曾根崎新地には旧くから現組合事務所の地点に、北ノ新地歌舞練場があつて、芸芸の練習を奨励し、恒例として温習会を催はして居つたが、これを京の都踊にならぬ、新曲に手をつけて「浪花おどり」と命じ」注1前掲書、六丁表。
- 4) 「同二十三年事務所が回禄の災に罹かるや同時にその建物を取毀ち、浪花踊も此処に一時中絶することになつた」注1前掲書、六丁表。
- 5) 「而同十二年五月偲(ママ)「面影浪花色彩」(略)同年夏遂に支那事変が起つたため、此の公演を最後として浪花踊は休止し」田中良『舞台美術』昭和19年、西川書店、p. 103。
- 6) 「当組合の古くより使用致しておりました、皆様にもおなじみ深き「北新地浪花踊」の名を今回より復活使用することに致しました」北新地待合、芸妓、芸妓扱所組合『北新地浪花をどり』番付、北新地待合、芸妓、芸妓扱所組合、昭和29年、一丁表。
- 7) 北新地関係者によれば、浪花踊は、万博の前年、昭和44年まで続き、昭和45年から、四花街合同の大阪おどりが開催されていたとのことである。
- 8) 田中良『舞台美術』(前掲書)、早稲田大学坪内博士記念演劇博物館『田中良氏舞台装置図集』財団法人国劇向上会、昭和5年。
- 9) 「市村座の関係の上に、花柳舞踊研究会との関係も加はつて吾々は又々此娯楽物たる浪花踊に対しても何等かの文化的向上への意義を付加すべきだと云ふ希望を持つて善処したくなり、次第に質的水準を高めるための道楽気を盛り込む様になつて、研究会に於て実験済みの新舞踊形式迄盛り込むで(以下略)舞台も愈々道楽気たつぷりで相等壺にはまり、演技者の実力も永い本格的修練の結果上達して浪花文化の一翼たらむとしつつ有つたが」田中良前掲書、pp. 102-103。
- 10) 「毎々述べた様に東京に於て展開した新劇、新舞踊運動は此頃に至つて、益々隆盛を極め、藤蔭会や花柳舞踊研究会の創作発表も可成り其意義と価値とを認められて、可否を論じられる声も大きくなつて来た時なので、北陽は其振付けを花柳寿輔氏に依頼した」田中良前掲書、p. 102。
- 11) 笠井は、東洋音楽学会第64回大会発表(論題「芸の解釈とライフヒストリー——舞踊家への聞き取り調査を通して——」)で、浪花踊の番付史料から写真の一部引用した。ご教示は、発表後、会場で頂いたものである。
- 12) 国立劇場近代歌舞伎年表編纂室『近代歌舞伎年表大阪篇』全八巻、八木書店 昭和61年~平成5年。
- 13) 国立劇場近代歌舞伎年表編纂室前掲書、第五巻、平成2年、八木書店、p. 723。
- 14) 「第十二回 浪花踊」国立劇場近代歌舞伎年表編纂室前掲書、第七巻、平成4年、八木書店、p. 43。
- 15) 「浪花風流 芦辺踊り」国立劇場近代歌舞伎年表編纂室前掲書、第三巻、昭和63年、八木書店、p. 673。
- 16) 「此花踊り」国立劇場近代歌舞伎年表編纂室前掲

書, 第五卷, 平成2年, 八木書店, p. 626。

- 17) 第二回浪花踊番付 (愛蔵版), 六丁裏所引。



- 18) 「第三十三回 南地蘆辺踊」。国立劇場近代歌舞伎年表編纂室前掲書, 第六卷, 平成3年, 八木書店, p. 149。
- 19) 注5 参照。